# 第六回東亜アルタイ学会

岡田英弘

東亜アルタイ学会（East Asian Altaistic Conference 東亜阿爾泰学会議）は前回から二年ぶりに、一九八一年十二月十八日―二十三日、中華民国（台湾）の台北において開かれた。今回は辛亥革命七十周年を紀念して、台北市政府が資金を提供し、ほかに主催者として国立台湾大学、太平洋文化基金会、国立故宮博物院が名を列ねた。

第一日の十二月十八日（金）は、午後三時から、外国からの参加者の投宿している台北市中山北路二段七二巷九号の金星大飯店（Hotel Golden Star）のロビーにおいてレジストレーションがあり、六時から林森北路二段の貴都蒙古烤肉において、今回の会長、国立台湾大学文学院長侯健の主催による歓迎会があった。

第二日の十九日（土）は、午前九時から、今回の会場である国立故宮博物院の講堂において開幕典礼が挙行され、今回の秘書長、国立台湾大学文学院歴史系教授陳捷先の司会のもと、侯健会長が開会を宣し、国立台湾大学校長虞兆中の歓迎の辞ののち、日本代表岡田英弘（東京外国語大学教授）、韓国代表李崇寧（韓国精神文化研究院教授）、アメリカ代表 Paul Hyer（Brigham Young 大学教授）の答辞があり、続いて国立故宮博物院長蔣復璁の講演「国立故宮博物院現蔵有関阿爾泰文物簡介」が行われた。この開幕典礼中、会場には多数の新聞社、テレビ局のカメラマンが出入して撮影を行った。

十時三十分から、岡田英弘の司会により、ペーパー・リーディングの第一セッションがあった。

孫同勛（国立台湾大学教授）「北魏初期の漢人・拓跋関係と崔浩案（The Chinese-Topa relations during early Northern Wei and the case of Tsui Hao）」は、崔浩の族誅は『魏書』の言うような史筆の禍に由るものではなく、彼の意図した漢人大姓の連合に依る中国型政権の樹立が、拓跋貴族の部族制権力の基盤と伝統文化をおびやかすものであったからだと論じた。

李樹桐（国立台湾師範大学教授）「初期唐朝と突厥との関係について（On the relation between the early T'ang Dynasty and the Turkut）」は、唐の高祖が北面して突厥に事えたという伝えを、太宗に美を帰そうとする史官の曲筆であると論じた。

李符桐（国立台湾師範大学教授）「元代のユダヤ教について（On Judaism in the Yuan period）」は、『元史』に見える「斡脱」の語が Judaea の音訳であるという論旨であっ

た。

本田実信（京都大学教授）「タラスのクリルタイ（Qurilta at Talas）」は、Rashid al-Din の『集史』に拠って一二六九年、Qipchaq Oghul（オゴデイ家）の斡旋で、現在のカザフスタンのジャンブルで開かれたこのクリルタイが、Qaidu（オゴデイ家）、Baraq（チャガタイ家）、Möngke Temür（ジョチ家）の和解を目的としたものであり、普通に信ぜられるように Qaidu をハーンに推戴したものではなかったことを論じた。

護雅夫「オルホン碑文における qut の語義について（On the meaning of the word 'qut' in the Orkhon inscriptions）」は、普通に fortune または majesty と訳されるこの語の原義が、「天神が人に賦与する charisma」であったことを論じた。

午後は一同打ち揃って、忠孝東路四段五五五号の聯合報文化基金会に、このほど新設された国学文献館（Center for Chinese Studies Materials）を訪問、台湾出版のアルタイ学文献の展示を見、聯合報の歴史と事業について映画によるブリーフィングと茶菓の供応を受けた。それから虎林街一二四巷三二一号の中国大陸災胞救済総会台北児童福利中心を訪問、丁碧雲主任の事業説明ののち、西蔵児童之家（八歳—十二歳のチベット人孤児男十六名、女十一名を収容）において文殊堂の勤行と舞踊を参観した。夕食は和平東路一段の師範大学近辺の餐庁であった。

第三日の二十日（日）は、終日ペーパー・リーディングに充てられた。

午後九時からの第二セッションは Stephen Durrant（Bringham Young 大学教授）の司会であった。

松村潤（日本大学教授）「シュルガチ考（Notes on Šurgaci）」は、清朝の公式記録から抹殺された建州右衛都督シュルガチが、万暦三十七年三月十三日のその失脚に至るまで、兄ヌルハチと拮抗する勢力を有したことを論じ、遼寧省檔案館所蔵の明代公文書に依って、その死が万暦三十九年八月十九日であったことを証した。

石橋崇雄（東京大学大学院）「八旗旗色の成立年代（The formative period of the Jakūn Gūsa（Eight Banner）colours）」は、清の太祖が一六二二年に遼西を征服して多数の漢人が八旗に編入されて以来、旗色による八旗の区別が始まったと論ずる。

劉家駒「明の皮島の清による奪取における朝鮮の助兵の故事（The episode of Korea's military assistance in Ching's taking of Pi Island（Pi Tao）from Ming）」は、清の太宗朝における明・朝鮮関係を論じたものである。

細谷良夫（弘前大学教授）「雍正末年における佐領の名称

(The arrow designations in the late Yung-cheng period)」は、『八旗通志初集』の「旗分志」に見える佐領の番号の成立に至る前に、保、合、泰、和、万、国、咸、寧の八字と、道、徳、仁、義、礼、智、忠、信等の二百字の組合せによって旗と佐領を一度に表わそうとする命名法の試みがあり、結局それまで各参領の内部で私的に使用されていた佐領印の番号が採用された経緯を、故宮博物院所蔵の檔案に拠って考証したものである。

十時五十分からの第三セッションは李崇寧の司会であった。

河内良弘（天理大学教授）「清朝初期におけるニマチャ氏の系譜（The lineage of the Nimaca family in the early period of Ch'ing Dynasty)」は、主として『李朝実録』に依って、同氏族の源流に溯ったものである。

広蘇美琳（国立故宮博物院満洲語顧問）「シベ族の伝統的習慣の思い出（Sibe niyalma i fe tachiyan doro)」は、シベ族の婚礼などについて満洲語で綴ったものである。

荘吉発（国立故宮博物院文献編輯員）「満洲人の漢数字による命名法を論ず（A discussion of the Manchu custom of giving names after numbers)」は、雍正二年十月六日付の奏摺を例に引いて、Ušiba（五十八）などの名は、父または祖父の年齢に由って命ぜられたものと論ずる。

二木博史（一橋大学院）「ハルハ・ジルムの文献学的研究（A philological study of the Qalq-a Jirum)」は、バローン・フレー本は一七七〇—一八二一年の間にジェブツンダンバ・ホトクトのもとで編纂され、それを改編したのがイヘ・フレー本であると論じた。

午後三時からの第四セッションは、Sechin Jagchid (Brigham Young 大学教授）の司会であった。

馮明珠（国立故宮博物院文献股助理員）「外八廟の興建と清初の西北辺防（The establishment of the Outer Eight Temples and the northwestern territory defense of the early Ch'ing Dynasty)」は、承徳の避暑山荘の東面から北面にかけて建立された十一のチベット仏教寺院の概説である。

宮脇淳子（大阪大学大学院）「十七世紀のオイラット——『ジューン・ガル・ハーン国』に対する疑問（The Oyirad of the seventeenth century: 'The Dzungar Khanate' revisited)」は、I. Ya. Zlatkin の『ジューン・ガル・ハーン国史』の所説を一次史料に拠って批判し、ジューン・ガル・ハーン国の成立は一六七六年のガルダンのホシュートのオチルト・チェチェン・ハーン撃破よりも後にあると論じた。

中見立夫（東京外国語大学助手）『中国』の観念に対する抗議——モンゴル人と辛亥革命（A protest against the con-

cept of the "Middle Kingdom": The Mongols and the Hsinhai Revolution)」は、漢人の「中国」が彼等の住地のみならず、清朝の領土全体を含む概念であったに対し、モンゴル人はこれに相当する概念を持たなかったことが、辛亥革命と同時にモンゴル独立が起った原因であると論じた。

Paul Hyer「モンゴル史における徳王の役割——愛国者か傀儡か（The role of Prince Demchugdungrub in Mongolian history——Patriot or puppet?）」は、徳王はモンゴル人同胞の救済を願って、中華民国のわく内での高度自治を目指したが、漢人側の無理解のために心ならずも日本の翼下に追いこまれたと論じた。

夕食は六時三十分から、故宮博物院別棟の福利餐庁において蔣復璁院長の招宴であった。

第四日の二十一日（月）の第五セッションは午前九時から、山田信夫（大阪大学教授）の司会であった。

Stephen Durrant「『論語』の一六七七年、一七五六年満洲訳本の比較（A comparison of the 1677 and 1756 Manchu translations of Lun Yü）」は、康熙の『日講四書解義』と乾隆の訳本のテキストを比較して、康熙本が満洲語よりは中国語に重きを置いた原文直訳体であるに対し、乾隆本はより自由に、満洲語として理解しやすくなっていることを例証した。

岡田英弘「モンゴル文康熙帝讃歌四篇（Four Mongolian songs in praise of Emperor K'ang-hsi）」は、『宮中檔康熙朝奏摺』第九輯に収める第七四〇号文書が、一六九六年のジョーン・モドの戦の直後、外モンゴル西部からのハルハ人亡命者が康熙帝に献じた、頭韻を踏んだモンゴル語歌謡四篇の満洲訳であることを考証した。

神田信夫「『百二十老人語録』を評す（Remarks on *Emu tanggū orin sakda i gisun sarkiyan*）」は、同書が乾隆五十四年（一七八九）、庫倫弁事大臣の職に在った正藍旗蒙古の松筠（Sungyun）が満洲語で著わし、その友人富倫泰（Furentai）がその百二十条の物語を分類して上下各四巻、計八巻とし、嘉慶十四年（一八〇九）に至って正黄旗蒙古の富俊（Fugiyūn）がこれを漢訳したものであることを明らかにし、その写本七種を比較してその史的価値を論じた。

加藤直人「伊犂将軍ジャラフンタイの奏摺について（On the memorials of Jalafuntai, the general of Ili）」は、天理図書館所蔵の『伊犂奏摺』と題する満洲語写本十七巻に含まれる咸豊七年（一八五七）から十年（一八六〇）に至る奏摺を紹介した。

陳捷先「ハメル『清代名人伝略』中の満洲語ローマ字転写法について（On the romanization system of Manchu terms in Hummel's *Eminent Chinese of the Ch'ing period*）」

は、同書のこの点についてなお不徹底の個所を指摘した。

十一時からの第六セッションは、全海宗（西江大学教授）の司会で、中食を間に挟んで行われた。

山田信夫「古代テュルク・モンゴル遊牧社会——中国史料を通じて（Ancient Turkic-Mongolian nomadic society）」は、中国の史書に現われる、類、種、部、氏、姓、族、邑、落、戸、帳、家など、遊牧集団を表わす語について、それぞれの規模と性格を規定しようと試みた。

成百仁（明知大学教授）「共通モンゴル語頭子音g及びkのダグール語転音考（A note on Dagur reflexes of Common Mongolian initial *q and *k）」は、一九七二年の東ブトハ・ダグール方言調査に基づいて、N.N. Poppeの規則が必ずしも当てはまらないことを示し、その条件を考えた。

中食は、市中で太平洋文化基金会会長李鍾桂女士の招待により海鮮料理であった。

午後二時三十分からセッションは再開された。

Sechin Jagchid（Brigham Young大学教授）「ダグール・モンゴル族のシャマニズム（Shamanism among the Dakhur Mongols）」は、一九七八年夏、Jirgalang（徳古来）から聴き取った伝統習俗を報告した。

Hukjintai（胡格金台、国民大会代表）「ダグール族の源流（Dahor uksura i da sekiyen）」は、満洲語で読まれた。

三時三十分からのBusiness meetingは、山田信夫の司会で、次回の予定が討議され、来年大阪で、また次次回はソウルで開くことを決議した。

終って別室で故宮博物院所蔵の満・蒙・蔵文資料の展示を見た。

五時からの閉幕典礼では、台北市長邵恩新が演説を行い、これに日本を代表して岡田英弘、韓国を代表して全海宗、アメリカを代表してStephen Durrantが答辞を述べ、続いて広蘇美琳が満洲語で、Sechin Jagchidがモンゴル語で、Abdullah T. Emiloglu（立法委員）がウイグル語で祝辞を述べた。

六時三十分から福利餐庁において市長の招宴があった。

第五日の二十二日（火）はExcursionで、バスで基隆の海門天険から宜蘭の故蹟を巡り、淡江大学歴史系副教授周宗賢が説明に当たり、帰って市内で夕食を共にした。

第六日の二十三日（水）は、午前九時から聯合報において昌彼得（国立故宮博物院図書文献処長）の司会で国学文献館の今後の資料収集方針についての座談会があり、中食は聯合報発行人王必成の招宴で一同歓を尽した。これですべてのプログラムは終った。

今回の東亜アルタイ学会は、全く陳捷先一人の奮闘のおかげで可能になったものであり、満幅の謝意と敬意を表した

い。

なお日本人の出席者は十三名、韓国人は全海宗、李崇寧、成百仁、辛勝夏（檀国大学副教授）の四名、アメリカ人は三名である。